

新刊紹介

Johan Adam Warodell, *Conrad's Decentered Fiction*

Cambridge University Press, 2022. xvii + 224pp.

渡邊 浩

本書はジョセフ・コンラッドの研究書として独創性が感じられる労作である。まずその着眼点が興味深い。すなわち、一般的な作品分析や研究という見方ではなく、どの章を見ても、普通の視点では取り組むことが難しいテーマと内容を扱っているところが読者の注目を惹くところである。テーマが示すように‘decentered’という言葉の意味は、文字通り「中心から逸れた」という意味で用いられていると解釈できる。本作が三部構成からなり、各部分の内容を考察するだけで執筆者の意図は明確になる。

第一部(‘Preprinted Documents: Paper, Pen, and Ink’)、第1章、‘Doodles and *The Shadow-Line*’では、対象作品に関する絵や模様など、一見いたずら書きとも思われる作家の原稿への書き込みを詳細に分析している。これらの書き込みは、確かに見落とされがちであり、ある意味で研究上の処女地ともいえる部分を多分に残している。しかし、原稿にのみはっきりと記されるこうした情報は、作家の心理状態や本音、気苦労などが吐露されている可能性があり、執筆上の本音がうかがえる貴重な情報源と考えられる。*The Shadow-Line* には、相当数の手つかずの一次資料と思われる絵図が残っていることを示し、かなり入念に調べあげている。結果として、戯れともとれるそれら原稿ページへの記入は、作家の手紙や子息ジョン氏の証言なども引きあいに出しながら、「決して暇つぶしの気晴らしなどではなく、創作を進めるうえでの役割をもち、書き進むうえで、平衡を打破してゆくための手段」としてとらえている。

第2章(‘Maps and *Victory*, “Geography and Some Explorers,” “The Secret Sharer” and *The Outcast of the Islands*’)では、主に地図に関する付随情報が分析されている。コンラッドの原稿に記される地図は、「フィクションの要素が強く、自分の描く世界や想像を強化し、具体化させるための手段」であることを指摘する。

Almayer's Folly の‘Author’s Note’における地図に言及し、明らかに作家は、「自分の記憶を補助するための‘springboard’として地図を活用し、実際の地図としての正確さとか緻密さを求めて描いているわけではない」ことを指摘している。また以下のように三作品における地図の役割を分析している。

In *Victory*, *Nostromo* and *An Outcast of the Islands*, the map is produced with the same ink and nib as the manuscript text and precedes a passage that describes the geography. Here the map functions as a preliminary stage in the writing process. Not as a complete and factual record, but as a draft open to changes: a draft from which to create a world. (44)

このように、あくまでも作家は、「自分の創造する世界を組み立てるための手段」として地図を描いていることを結論付けている。

第3章(‘Drawings and *The Sisters*’)では、未完の小説、*The Sisters* における作家の絵について分析を行っている。この絵については、「原稿に描かれていたものが、*The Return* の原稿とともに、しっかりと鍵がかけられた引き出しに保管されており、それ自体が作家の秘密にしておきたい意図をもつ」ことを示している。また *The Sisters* の登場人物 Doña Rita が描かれているが、後の *The Mirror of the Sea* と *The Arrow of Gold* に登場する同名人物との関連性については明確な関係は不明としている。この作品の主人公 Stephan については、絵を描けない画家、描こうと苦悩する画家として登場している。スケッチ的な絵を描くことが好きでもあり、得意でもあったコンラッドが、そうした活動が盛んな時期にこの作品を執筆したことは興味がそそられる。また Stephan は、*The Secret Agent* (1907) にもほぼ同名の若者 (Stevie) が登場し、紙に模様を書く場面が描かれているが、ものを描く作業が、作家の創作活動に結びついていることを連想させる場面が時々登場するのである。この未完に終わっている作品は、当時のモダン・アートの傾向から影響を受けた作家が、絵を描かない画家 Stephan を登場させて、「具体的なアートの行き先がわからないと考える作家の意見を代弁させている」のではと人物関係に関するコメントを添えている。それは自分で Doña Rita の姿を実際に描きながらも、「Stephan に絵を描かせない作家の苦悩なり迷いが込められている」作品としてとらえている。そして未完に終わっている事実も理解できるようなヒントが残されてい

るのである。

第二部（‘Published Texts: Working Method and Philosophy’）、第4章（‘Decoding and *Heart of Darkness*’）では、作家の独特な物事の描き方、特に場面に登場する物を客観的、また物質的に描写することにより、実際の場面描写のような現実味を与えていることを指摘する。*Heart of Darkness* において、特に現地人によってボートが襲われる場面では、当初何か長い物体（‘cane’）と思われたものが、よく見ると‘the shaft of a spear’であることがわかり、犠牲者までも出るが、対象の理解までに時間差が生じている。また物の描写だけではなく、*The Rescue* においては、「‘love’という言葉在意図的に用いずにロマンス的な内容を描写する手法」を指摘する。こうした手法に対して‘delayed decoding’という言葉を用いて著者は説明を加えているが、比較的コンラッド作品に目立つ手法としている。

第5章（‘Distraction and *Heart of Darkness*, *Lord Jim*, *The Secret Agent* and *Under Western Eyes*’）では、各主要作品における、一見些細な描写が作品に与えている影響を分析している。*Lord Jim* に関しては、Marlow による非常に長い独白とも解釈できる物語であるが、作家の序文によるコメントも含めて、「話の脇道にそれること、‘interruption’がある意味歓迎すべき創作中の休憩となる」ことを指摘する。こうした効果はこの物語だけではなく、Almayer や Wait による「白日夢」（‘daydream’）の中にも見出せることだと指摘する。*The Secret Agent* に関しては、多くの‘interview’の設定や、Verloc が飼っている猫の描写など、筋道から逸れる部分が多々ある。Stevie が犬や猫に気をとられながら奇妙な行動をとることも、作家が注意を逸らしているわけではなく、「全体の語りに関して重要な役割」を持たせているのである。それはまた *Under Western Eyes* においても同様であり、いくつかの‘interview’の挿入や Razumov の日記自体が、ある意味でメインプロットからの大きな逸脱ともいえるのであるが、「そうした要素が全体的に物語をつなぎ止め支えている」と指摘する。

第6章（‘Details and *The Secret Agent*’）では、*The Secret Agent* という作品自体が、些細な表現や要素に支えられ、特に‘walking’という行為が、Verloc などの動きに付きまとい、「各章を繋げる重要な働き、‘tentacle’のような働き」をしている状況を説明する。些細な何気ない行動や癖の重要性を指摘するのである。

第三部（‘Patterns and Preoccupations: Marginal Voices and Characters’）、第7章（‘Voices and *The Nigger of ‘Narcissus’’*）では、*The Nigger of ‘Narcissus’’* に

おける「声」の扱いを中心に論じているが、それは作家が目立つ、英雄的な場面の声を扱っているのではなく、日常的な‘hubbub’と思われるような声すらも取り出して、「船乗りたちの日常における英雄的な姿、危険や恐怖にも負けぬ英雄的な姿」を映しだし、またそれは同様に‘cargo’においても単なる船荷を運ぶ単純作業ではなく、「危険な海上生活における日常の仕事に英雄的な意味合い」を込める、あるいは描くことに成功していることを指摘する。海上生活の中で、英雄的な死を遂げる描写は少なく、むしろ一見平凡で単純な死が描かれる場合が多い。しかし、それだからこそ、嵐の中で「コーヒーを出してあげる」行為など、些細な行動に英雄的な意味合いが込められていることを指摘する。第8章(‘Hats, *Nostramo*, “The Secret Sharer” and *The Secret Agent*’)では、文字通り「帽子」の役割を分析している。*Nostramo* における Dr. Monygham の古くて汚れたパナマ帽などが、「反体制の意味が込められている」と考えられる例を示しながら、‘The Secret Share’においては、船長によって偶然発見された‘the white floppy hat’の存在が、船の進行を確認したり、暗闇で無事浅瀬に近づくための役割を果たす様子が描かれる。このような帽子という小道具が「大きな役割、また象徴的な役割」を果たす点があることを示している。*Under Western Eyes* においては、革命家と称する Ivanovitch が ‘silk hat’ を被る姿が描写されるが、革命家としては裕福で外観を気にする、怪しげで胡散臭い雰囲気醸し出している。*The Secret Agent* においては、Winnie が、弟 Stevie の復讐の為に夫 Verloc を殺害し、罪の意識や恐怖にとられる。その時「自分を追い詰める人たちや権力の象徴を‘the silk hats’を被る者として描いている」と分析する。*Nostramo* においては、Guiseppe Garibaldi が被る ‘the Bersagliere hat’ が革命の英雄としての描写に使われたり、歴史的な意味が込められている点を指摘する。

最後の第9章(‘Animals, *Heart of Darkness* and “The Planter of Malta”’)においては、作家独特の生き物や動物の使用(‘metaphor’ と ‘simile’) に関して、その描写が常識的ではなく、「読者に疑問を呼び起こし、説明を必要とする表現」として突然使用されている点を指摘する。コンラッド作品においては、実際に動物が注目される場面はほとんど登場しない。例えば *Heart of Darkness* において、象牙が象徴的な役割を果たすが、象は登場しない状況などもその典型といえよう。しかし読者の関心や注意を惹くような表現、‘The Planter of Malta’ 中の ‘sentimental bat’ や *Romance* の ‘bloodthirsty pigeon’ などを例に挙げ、ある意味、

「モダニスト的な使用法」という分析を示すが、こうした奇抜な、動物を用いた表現分析は、今後の課題であるとも位置付けている。

以上のように、全体的にこの研究書を総評してみると、やはりタイトルに示されているように、「中心から逸れた」(‘decentered’)という言葉が生かされていることがわかる。中心から逸れてはいるが、決して「重要ではない」ということにはならない。特に第一部に示される内容は、実際の手書き原稿等から確認できる貴重な情報、一見、いたずら書きや戯れと思われる絵図から、作品への関係性、作家の心理を考察してゆく手法等、大いに作品分析に役立つ内容を有している。完成原稿とは異なり、作家の本音や精神状態などを推察するにはかなり興味深い資料といえよう。しかも一般的に研究者や読者も目にしにくい対象が多いので、隠れたヒントになることが期待される。第二部では、中心的な分析の対象となりにくい、見落としやすい事柄の分析がまとめられている。武器や道具の描き方、プロットからの逸脱、些細な行為の意味等、分析が進められるほど、それらの物語中の働きが納得させられる方向性で考察されている。第三部では、一見些細な「声」「帽子」「動物」等の描写に関して作家独特の扱いが施されている点を分析している。確かに全て‘decentered’として見過ごされやすい部分を扱い分析を加えている点に、この書の価値はあるといえる。確かにグラフィックとしての題材を扱った第一部と、その他作中の要素を扱った第二部、第三部を切り離して、さらに発展的な考察を加えてまとめるという方法も考えられ、その方が業績としてわかりやすく、まとまりが理解できるという考え方もあるかもしれない。しかし、全体としてコンラッド作品における周辺事項、煩瑣な部分と考えられがちな要素を明確に取り出して論じ、一冊にまとめたという点は高い評価に値するであろう。今まで断片的に指摘された要素も一度に収集して提示した点は、今後の研究資料、また重要な示唆として活用できる一書と考えられる。

(わたなべ ひろし 就実大学 教授)